

## ちょっと一言

「ちょっと一言」は学会の見解を掲載する欄ではなく、国内外の情報の紹介や日頃考えている事柄などを個人の責任で自由に投稿できるコーナーです。多様な方々の広範な投稿をお待ちいたしております。

### GNP(国民総生産)から GNH(国民総幸福)へ ーブータンにおける社会と技術ー

都甲 由紀子

#### 1. ブータンとの縁

私が「ブータン」という国を意識したのは、今から4年ほど前のことでした。当時、私立中高で家庭科の教諭として働いていた私は「地球家族」という写真集を教材に使っていました。この写真集には、世界30か国の平均的な家族の持ち物と暮らしが紹介されています。この中にブータンが紹介されていました。「国民一人当たりの所得」の金額を見た瞬間、「私の貯金と退職金を持ってこの国に行ったら、一生働かなくてもこの国の普通の生活ができるのかも…」



<ドゥルックエアの飛行機>

とってしまったことを鮮明に覚えています。でも、その次の瞬間に、そうしてしまったことに対して、悲しい気持ちになりました。「お金さえあれば、生きていける」という感覚が、そうしてしまった理由であるということに気づいたからです。私は自分で「世の中、お金だけがすべてじゃない」と思っている方だと自覚しているつもりでしたし、家庭科の中で生徒に対してそう教えてきたつもりでした。しかし、実は「お金さえあれば生きていける」と



いう傲慢な感覚を持っていることに気づかされました。そしてその写真集に載っているブータンの人や景色の写真を見ながら、ブータンの人たちは貨幣経済に頼り過ぎずに生きているのだということも想像しました。ブータンの社会では、お金を持っていることより田畑や家畜を持っていること、その田畑や家畜を維持できる技術と丈夫な体を持っていること、生きるために助け合える家族や友達がいることの方が本当に大事なことなのだろうと思いました。そのときには、自分がブータンに行く機会を与えられることになるなどとは思っていませんでしたが、今にして思えば、そのときから私はブータンに縁があったような気がしています。

<農村の棚田の景色>

仕事を辞めて大学院に戻ったとき、担当教授がミャンマーに関わって天然染料のラックの研究をしていたので、その研究メンバーに加えてもらうことになりました。そして、ラックのことを調べていくうちに、ブータンに行きたくなりました。そう思っていたら、ヤクランドのブータンツアー参加者募集と大学の女性リーダー育成プログラムの学生海外調査研究希望者募集を同じ時期に知り、それらを組み合わせたら、今年の4月24日から5月7

日までの2週間、ブータンに行かせていただけることになりました。こうして不思議な縁があって、ブータンに行くことができました。ブータンの自然、仏教、文化は私にとってとても興味深く面白いもので、毎日が驚きの連続でした。ブータン人は日本人に似た顔立ちをしているのですが、敬虔な仏教徒としての信仰心の強さやブータン仏教と日本の仏教との違いには驚かされました。国民の多くは自作農であり、貨幣経済でははかれない豊かさを持ち、世界初の禁煙国家であり、国民に民族衣装の着用が義務付けられていて、不思議な文化を継承している国でした。元家庭科教諭の視点から見たブータンという国について書きとめておきたいと思います。

## 2. ブータンという国

ブータンは、インドと中国の間のヒマラヤの麓にある国で、九州ほどの面積に人口約66万人が住んでいます。言葉は主にゾンカ語、通貨はニュルタムです。チベット仏教の国であり、国民は敬虔な仏教徒です。王国であり、28歳のジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク第5代国王が即位したばかりで、先日戴冠式がありました。今年、初の選挙も行われ、先代の国王の意向により議会制民主主義に移行したとのことです。



写真の真ん中の建物は日本の霞ヶ関に当たるタシチョゾンです。釘一本使われていない伝統建築法で建てられたブータンの政治の要となる建物です。王様のオフィスや国会議事堂にあたる場所もこの中にあるそうです。さらに、この国の仏教の総本山でもあるそうです。蔽かな雰囲気でのよい眺めでした。

ブータン西部パロに空港があり首都はティンプーです。ティンプーの標高は2400mで、かなり高いところにあります。7000mをこえる山も国土の中にあるので、標高3000~4000mの場所は「山」ではなく「丘」と呼ぶのだそ

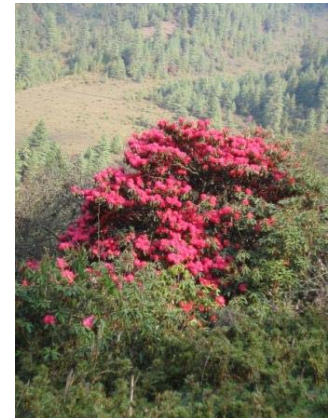
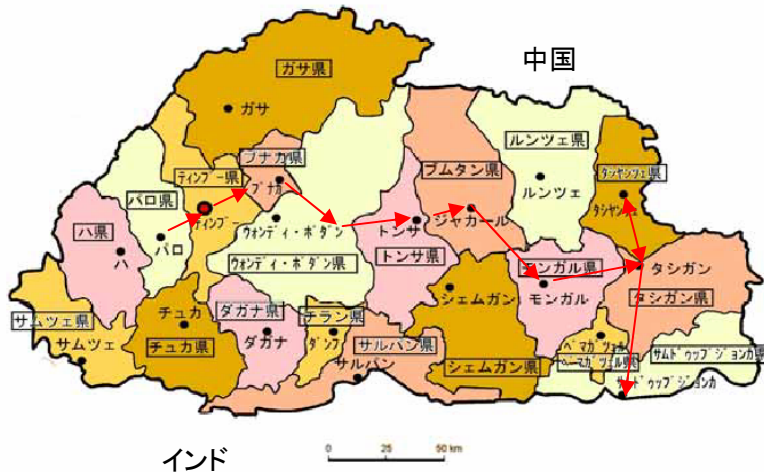


<仏塔・ダルシン・ルンタ>

うです。ブータン人にとって富士山は山ではなく丘ということになります。

パロからサンドゥップゾンカルまでの長い道のり、いろは坂のような道を、トヨタのバスに乗って走りました。トンネルはないし橋もほとんどありません。ブータンの中でもなかなか行けない東ブータンまで、ブータン国内を横断し、ただひたすら山道を通りましたが、深い谷を見下ろし、高い山を眺め、きれいな段々畑、珍しい石楠花の大木、かわいらしい鳥や猿、ヤクや牛、派手に裝飾されたトラック、宗教的な旗(ダルシン、ルンタ)や仏塔などに遭遇しながらのドライブは、飽きることはありませんでした。

【ブータンの地図】 赤の矢印が今回の旅の行程です。<sup>1)</sup>



<石楠花>

### 3. GNHを追求する生活と家庭科教育

このブータンという国を世界的に一躍有名な国にしたのが、ジグミ・シンゲ・ワンチュク第4代国王の次の言葉です。「Gross National Happiness (GNH) is more important than Gross National Product (GNP).」国民総生産よりも、国民総幸福の方が大事であるということです。一人当たり GDP が日本の40分の1くらいの国であり、経済的に豊かとはいえない国ですが、ブータン研究所で「国民の幸せ」について概念的なレベルを超えて実際の



<第4代国王>

政策を作っていくレベルでも研究されています。ブータンでは GNH を実現するための 4 つの柱として次のことを挙げています。「経済成長と開発」、「文化遺産の保護と振興」、「環境の保全と持続可能な利用」、「よき統治」の4つです。GNH が GNP より大事と言ってはいますが、相反するものであると言っているのではなく、内包するものであるということです。そして、「経済成長と開発」とそのほかの柱とのバランスをとることが大事であり、そうすることで何より国民の幸せ、精神的な満足感や充足感を最優先させるということを強調しているのです。GNH はこれからの日本においても共通する価値観になり得るのではないかと思います。

私が接したブータン人はチベット仏教を篤く信仰し、国王を敬愛する人々でした。高い山と深い谷と段々畑の景色が広がっている厳しい自然環境の中で、人々が助け合いながら生活しているということを目の当たりにしました。同行の久保さんがガイドのキプチュ・ドルジさんのことを人の喜びが自分の喜びになる人だと紹介しましたが、彼はまさにそのような精神的豊かさを感じさせる人でした。彼は、優しく、礼儀正しく、ユーモアがあって、たくましさも持ち合わせている人であり、常に民族衣装のゴをきちんと着こなして



<民族衣装姿のキプチュさんと私>

いて、この海外派遣前に本を読んでイメージしたブータン人そのものという感じがしました。Gross National



Happiness (GNH)を国王が提唱した国の幸福感を支えるブータン人の精神的豊かさを感じ取ることができました。

日本では、経済的利益や物質的豊かさに偏った発展をしてきたことが、現代社会における閉塞感につながっているように思います。もちろん、経済成長や文明の発展が日本社会にもたらした恩恵の大きさは言うまでもないことですが、精神疾患や自殺者の増加、詐欺事件の横行などは、GNP や GDP では測ることのできない精神的豊かさを大事にすることを疎かにしてきた結果ではないかと思われます。

#### <プナカゾン前のジャカラダ>

キプチュ・ドルジさんの話によると、ブータンの学校では家庭科は必修科目ではなく、選択科目として女子のみが織りなどを実習する内容が存在するだけであるとのことでした。現在でも、ブータンの子どもたちは学校ではなく生活の中で衣食住にかかわる基本的な技術を習得しています。今後も近代化が進む中で、ブータンの生活文化を継承しつつ、豊かな精神性を伝えることを目的として、実習も含む教科として、家庭科教育を必修として取り入れたらよいのではないかと思います。また、日本の家庭科教育の中で、仏教信仰とは関連させなくても宗教を超えた精神性として「人の喜びを自分の喜びとして喜べる人を育てる」ということを目標の一つに加えて、豊かな精神性をはぐくむ教育の一端を担っていくことができないかと改めて考えさせられました。

#### 4. 近代技術と伝統文化を融合させた豊かな社会

第4代国王の王妃様は、著書の中で次のような文章を書かれています<sup>2)</sup>。

「ブータンは、外の世界や二十一世紀を寄せつけないようにしているわけでは決してありません。わたしたちは繁栄を欲していますが、今まで育まれてきた伝統と文化を犠牲にすることはできません。わたしたちは近代技術の恩恵を蒙りたく思っていますが、それはわたしたち自身のペースで、わたしたちの必要に応じて、わたしたちがそうすべきだと思ったときに実施しています。(中略)この IT 時代の、ますますグローバル化の進む経済機構の中で、ブータンはいつまで独自のアイデンティティと高度に精神的な文化を保つことができるだろうか、と多くの人は疑問視します。わたしは個人的に、何の疑いも抱いていません。マニ車〔祈祷真言筒〕に納められる、従来は木版で手刷りされていた祈願文が、今ではコンピュータを使って巧みに印刷されているのを見ればわかるとおり、ブータン社会は、深く伝統に根づいていると同時に活気に溢れ、新しいアイデアを評価し、受容し、変容し、それをブータン流の生活の一部に取り込んでしまう並外れた能力を持っています。」

ブータンという国は、こうして近代技術と伝統文化を融合させつつ、世界で初の試みとしてGNHを研究しながら、いわゆるただ欧米化していく発展ではないブータン独自の発展を目指しています。近代技術をどのようにブータンの生活に取り入れていくかということは慎重に吟味されています。国土に占める森林の割合が60%以下にならないようにすることや、環境を悪化させたり野生の動植物の生態を脅かしたりするような工業・商業活動を禁止することなどが法律で定められ、いわゆる現代の先進国が発展により犠牲にした部分を見据えた政策がとられています。環境保護の観点から、道路建設や電線の設置を見送る地域もあるとのこと。発電は標高の高低差を利用した水力発電で行われており、そのほんの一部の電気を国内で利用して残りはインドへ輸出しているそうです。環境を保護しつつ天然資源を有効に活用する技術は積極的に取り入れ、変化を恐れないけれどもその変化が本当に必要かどうかを常に見極めながら発展を推進しています<sup>3)</sup>。今後もこの国の動向に注目しつつ、日本人である私は日本の発展の方向性についても考えたいと思いました。



<ティンパーの建築現場(足場は竹)>

ブータン滞在中、日本製の自動車やテレビを目にすることが多かったことには驚かされました。日本人により農業や土木などさまざまな分野で技術指導が行われたという話も耳にしました。日本の技術は世界中で人々の生活を便利にしているのだということを感じました。日本人はこれまで、様々な不便を克服するために技術革新を重ね、近代技術を発展させることで経済的にも発展し、昔の人が夢に見た生活を手に入れました。しかし、その生活を続けることで人々の健康を脅かしたり地球環境を悪化させたりして自分で自分の首を絞めてしまう可能性があるという側面にも気づいています。今、そのような現実に対して早急な対応が求められています。環境問題についての教育にも、家庭科のもつ役割は大きいと思いますが、このような問題への対応には、政治・経済、産業、教育などのセクター間の連携が重要課題であり、それぞれの現場に軸足を置きつつ今後の技術発展について議論する必要があります。そのような議論ができる場として社会技術革新学会に期待できる役割は大きいと思います。「ものづくり」の技術だけではなく、環境問題を克服する技術革新が今、求められています。ものづくりと環境対策の両面からの技術革新を進めて、経済発展、政治の安定、伝統文化の存続や人々の精神面における豊かさの涵養とのバランスをとりながら国民皆が幸せを感じられるような社会を日本に築いていくという方向性への発展を目指したいものだと思います。

#### <引用文献>

- 1) [http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/buutan/pdfs/kn06\\_01\\_0002.pdf](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/buutan/pdfs/kn06_01_0002.pdf)
- 2) ドルジェ・ワンモ・ワンチュック, 今枝由郎訳, 王妃が語る桃源郷の素顔 幸福大国ブータン, NHK 出版, 2007
- 3) 今枝由郎, ブータンに魅せられて, 岩波新書, 2008

平成20年12月3日

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間環境科学専攻 都甲 由紀子